



增上寺黒女尊縁起

093. 1
2043
佛教大学蔵書
第 2006322338号





三縁山増上寺

黒木乃阿弥陀如来御縁起

當山眞座黒木乃阿弥陀如来御長武尺六寸意心
 僧都乃河地之法護國家河地也抑はるの
 来由を考ふる昔僧都彫刻の志し随ひ
 縁を横川乃みよし所しある機縁小應して
 阿彌三洲童子明眼ちふ考建河地室家おそに
 ぬり合泥の光を香煙り思ませ給へ世挙く



黒木とるよりありぬ

或は神子 穢草の御持の御子 二河ましくいふ
餘の二河の御佛をいふ御子といへるにまじりては

常小室なるを信しりて是よりなるは嘉祥とあるにまじりては
河平白なるを信しりては二河ましくいふ御子といへるに
實基院御宮の御地といふと信すまじりては又まじりては
御地といふは事まじりては又まじりては

且と永保年中乃事とて東照神君いまた尾訪の城主に

はしくは印時参列一向門徒の中小送を企る者

ありて一向は蜂起をて時神君別那乃騷動を解ゆ

然しとて士卒を催し彼時那の時境内小印語を擲き

に賊徒皆ひ挫くとして雌雄倅小改りなく見えたり

神君の草創啓運の心と知らり大樹寺小おめく浄土の

安心を免れりて彌陀法王の計定御方成御子に

武運長久の御祈已久しき幸い此の御方成御子に

和融の御祈願をておまじり御子凡小草れ

おひくくはくはくはく御魔下小属りておは

いよくおまじり御地御まじりて頻小伎寺に御聖

一とて遂り御自筆の御書をして信入れは

衷心を御承院下御方成御子御地御まじりて

おはし御地御先之向可立御子御地御まじりて

今御地の自願除寺上高寺進出御地御地御

おはし御地御先之向可立御子御地御まじりて
今御地の自願除寺上高寺進出御地御地御

聊非其依の家康持佛堂可安玉水多油
惟樂之助下入いりて沙

三月廿二日

家康 立印判

明眼寺

又御願満足乃所希と云拾石の寺は奇所なり
奇なるも玉海乃御志と感し遂にける像を拵せり
神君御所おのたまふ三輪ま〜〜〜にけり
湯仁しぬい二世の御清く事々武田勝頼母
を誨ひ教々友の令我竟ふ賜利を授るとあるに時小
一の高筆をもて我々家の子小窓を授け釋小童
子長居し然り〜〜にぬく秘本を授け修く又ある
志似〜〜を教誨し小童家人の身とありぬ
〜〜をいり家子おのれ者よ寢食ふ侍〜其
際をうがよと爲大元々運入平天下のいり
石將おま〜中〜と遂に寺に方便な〜

今をちがひてと白虹の勢を無と摩小と
神君は我れも志はしやと常の度新
成もあひ志はしやと常の度新
なる御礼もたせあひいふ小家康起居て念佛せ
るると御聲はしやと常の度新
志はしやと常の度新
御夜も吾ひ入り御夜も入るなり二刀も切なき
年こそくたせしやと常の度新
敬しきと常の度新
小音と櫛も御前小引居る御もくも罪科も
かこちりも御もくも御もくも御もくも御もくも
う節を守りて死を極むる意は貴もくも御もくも
御もくも御もくも御もくも御もくも御もくも御もくも
寛仁大度の御もくも御もくも御もくも御もくも御もくも
くも御もくも御もくも御もくも御もくも御もくも御もくも
持もくも御もくも御もくも御もくも御もくも御もくも御もくも
御もくも御もくも御もくも御もくも御もくも御もくも御もくも
擁護むりしやと常の度新

まねいなりをふおひくそとてやてしとて今此
如い道の念珠是あり 神天ハ夢威の靈發は
ちしほまきくし尊像を崇敬しとてい道小富を
天下を打ち威四海小くり萬機乃汁深ひ吐握
の汁いゆまきまきまきまき身も日課六万遍乃
即念佛を一日もあこころ治まことりしとて
運命ハ富を善悪の業よりく運衰指掌は此小
顕く事あり又福を轉く福を福を重きを惟ふ
移も佛神の擁護小ありほりしとていとてり
如來ハ起を乃願王大悲れ推演そりしとてり
かりと免く信仁の志りし人いそり感應の期ち
らしとて去後小慶長二年關原陣の時嵩山存應
國師より即下令を以て裁是先親の所嘉例ともいふ
即又細り代々各湯の城をく大樹を和南の十合を史をりしとてり
むハ世のい四十合をこととせむのいりしとてり又武田信玄を
の事ハ陽軍源
小まきく
山ハハ天下太平御事孫繁原ハ御祈願を
松ハ十八云の嘉名あり佛の十八教よとてり
國東小大檀林
乃御建立し此とてり思召立せりしとてり九月朔
既小御也馬まき先嵩山ハ御世あり御門者の御祝也

こゝろ天上天下唯我獨尊乃法向を以て信ずるは
是より予を授く詩を賦し陳と對して笑と俾
せしも敢く況ゆるさうは佐久屋京師凱陣の後
孝長八年小 神君 征夷大將軍に任せしむる事
十年小 台徳院殿亦 征夷大將軍に任せしむる事
年尚山在應和尙普光觀智國師
勅汗成

神君ははるの山城を 台徳院殿小

懐くせむい 御座を後序の山城に授けしむる事
かごと後序の山城を 予に授けしむる事
御陣乃とれあると奉侍し 征夷國師の上は
了的の古信おの 古の信を以てしむる事
茶臼山の御陣屋も 朝夕の所行已極く分る
かくて一日の信を以てしむる事
陣前の軍もさし給へり 草入るれ而陣勝負は
敷並のこゝろに 征夷の御陣より 征夷威
の證を以てしむる事 武者一人敵陣にかけ入右應大接
子軍万石柳子奮迅のつよむる事 汗雲を以て
働は直人といひ見く 言上を 神君笑し問

とまほ真田伊豆入道あつては信れさるまほ入道

此方いさゝかのより尸たれどもさし沙度とまほ

木さるれ河厨子を閉るまほありかる唯河原先

のこりして子躰をえ給へぬ今日のみ戦ふ

もさるれ河加勢あつて頻り少威渡を流さるまほ

元和元年五月上旬とて用えし戦日既にくは

る像ハ御座す帰るまほは全身に汗ハ河原中

流炮の迹付をばし御方の毛も為置てまほ

はとまほ神居川を渡りて中津のふもとをまほ

りしとまほ神居川を渡りて中津のふもとをまほ

まよむ程なく大坂落城一天下一統津代善世松吹風

御凱陣の川に旗をまひかきし也さるか

小池の台にひさしをばし神居川を渡りて中津

をばしをばし流るる御面貌をばしをばし

乃腹内小納言をばし御面貌をばしをばし

まほまほまほまほまほまほまほまほまほ

壽像尤に廟堂の地は移さるるまほまほ

神居川他界の後山壽像はまほ常山安国殿は

安永殿始本堂造りし御徳指しより寛永十八年 大猷院殿の上より御
一切の御徳を大猷の御徳とて今の九山の御まの造営とす

表は鷹の御門より

神主の御徳を御徳とて造りし御徳とす

次は石の御徳を建て御本殿より六十六の御徳とす

御神鏡の御徳を建て御本殿より御徳とす

佛具を建て御本殿より御徳とす

御本殿より御徳とす

御本殿より御徳とす

御本殿より御徳とす

御本殿より御徳とす

御本殿より御徳とす

御本殿より御徳とす

御本殿より御徳とす

御本殿より御徳とす

御本殿より御徳とす

御本殿より御徳とす

御本殿より御徳とす

御本殿より御徳とす

本尊もまた御も随逐新讀し多ひし御小川
沖本池と信する人きかり去小あて一山の流徒出賣あ
れ念誦よ本地供する人佛説阿弥陀經を讀誦し
なる小念佛薰沐具六倍増法樂の御馬具法後日家
の御新戸毎時修する事あり信又御馬具法所より
此御城移し給ひ 台徳院殿の御る敬代町に是あり
朝夕御拜儀の由あり御城中に佛堂を接ひ佛堂平川原
又此の遺像小信所の給仕甚御修する天徳寺御堂大徳寺
本御寺も右に寺の信を御信まの信よ定りし大徳寺
信よ信をらる 之後 大徳院殿の由あり上意を此也と
と 神皇の御宗敬ゆきとせし御り今世の身
業もやに御遺入りの趣にませ御堂の地り 御堂に
なる御り 南山の方丈小御道永き御堂に空
己年五月廿二日の長方丈に失火を起し一風烈しく燄火
うき空におきし遺像を出しも御り方便を其とき
いつくとも空に御堂威する男子一人擡棺の中より
難なくあきとせし御り法守慈母の計詞入きをぬ
人し御り御人とも御りし七や御りしも御りし

かくて一山の太龍も亦再束の心地きて群衆瞻禮して在り
 悲しむ亦亦の憂の心かけ快し是りすはいりす双の
 霊修の功も亦す疾付も修りてなれりしてさよこ
 うましく嘆きあつた所も不思議や灰燼のうへに教の
 鳥祥集の如くも人と人にお寄り焼灰をまきつけん
 即の元キ傲然としてかきせよ圓氣再び喜の眉をひき
 即相好圓満し今ひ今の心も亦も如の如くはるぬも理り
 られし鳥、慈世の権現の印使者もや前も亦一人の男も是れ法也
 慈世権現の心示現さるるとも疑ふなればは慈野三郎の
 中證誠切と在比つらるに後をも之も在也
 佛乃乃もとの権譲のさきりと衆もくけ外信信教
 乃亦亦の印利益を蒙りてさき事務奉還分
 唯舊記の中を畧抄して事実を記し、さきも
 蓋以ては危言述一切能はるの願王も時世亦の
 由る事なりし人王に代りて天皇に御宣佛教の
 心も亦さるるに世に傳はりて天照太神倭作命云宣
 一ハ降出之量勢終天下養平乃御經文あり
 又二十五代紀の天皇の心も亦さるるに深の如く惠臨法所

勅を承て、是等寺院を講し、國家安寧乃
御給ひ、御子孫を法王の首、大威徳王の
利益を祈り、西方大威徳の王、六つあり、その中の教念禰、その
西康、除、休、立、才、おせ、乃、ち、も、ち、り
惟仁親王、忽天子の位に即位せし、保氏の今、乃、は、院、也、其、の
擁護を信とす、皇、照、非、君、つ、み、り、も、せ、れ、基、を、ひ、く、を
御子、實、ま、つ、大下和、明日月、清明、う、ま、け、あ、る、の、以、威、光、日
小輝、を、祈、り、こ、も、目、お、は、れ、御、代、の、ま、さ、し、ら、ん、た
皇、也、と、御、御、起、平、也

宝曆十三癸未二月於紀阜山派寫平

郷方譽随良辨

追加

宝曆十三年、乃、は、院、也、其、の乃、は、院、也、其、の、
教念を、乃、は、院、也、其、の乃、は、院、也、其、の、
御、建、立、善、り、一、英、を、乃、は、院、也、其、の乃、は、院、也、其、の、
御、供、料、若、干、御、厨、子、の、乃、は、院、也、其、の乃、は、院、也、其、の、

の秋の比 倭信院殿忠為御侍ノ御代ノ御代ノ御代
あるも御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代
御方ノ御方ノ御方ノ御方ノ御方ノ御方ノ御方

御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代
御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代
御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代

御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代
御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代
御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代

御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代
御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代
御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代

御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代
御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代
御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代

御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代
御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代
御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代ノ御代

寶曆十三 亥 三月 良養上人ヨリ写之



2
20
23
x
2
1



